様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２５日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2009～2010
課題番号：２１８２００５９
研究課題名（和文）　露清間の国境画定から見た中央アジア諸民族の帰属・民族意識の研究
研究課題名（英文）　Research on the sense of belonging and ethnic identities of the Central Asian ethnic groups from the viewpoint of the demarcations between Russian and Qing Empires
研究代表者
野田　仁（NODA JIN）
早稲田大学・イスラーム地域研究機構・研究員
研究者番号：００５４９４２０

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代における中央アジア諸民族の社会を大きく規定していたロシア･清朝という二つの帝国との関係を踏まえ、とくに両国間の境界線を手がかりとして、集団の移動と帝国の領域との間の相関関係を明らかにするものである。それによって、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、露清間国境を越えて移動していた周辺諸民族（とくにカザフ、クルグズ、ドゥンガン（回民）など）の帰属と民族意識形成の問題を解明することができたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This research project, focusing on the boundaries between the Russian and Qing empires which had greatly restricted the societies of the ethnic groups in the modern Central Asia, tries to explain the relationships between the movements of ethnic groups and the imperial territories. In this way, the project could explore the problem on the formation of the sense of belonging and ethnic identities of such groups as Kazakhs, Qirghiz, Taranchis (Uyghurs), and Dunghans, who were moving around the Russo-Qing border area from the second half of the nineteenth century to the beginning of the twentieth century.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,080,000	324,000	1,404,000
２０１０年度	970,000	291,000	1,261,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,050,000	615,000	2,665,000

研究分野：中央アジア史
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：ロシア、国際関係史、清朝、中央アジア、新疆、カザフスタン

１．研究開始当初の背景

(1)近代中央アジアの歴史を考えるとき、ロシア・清朝という二つの帝国との関係は、欠くことのできない要素となっていることは疑いない。研究代表者は、中央アジア諸集団の中でもカザフ遊牧民の動向に焦点を当てて、その露清間における立場を示すべく研究を進めてきた。結果として、新疆やカザフ草原にかかわる露清間の西方境界について、当初は両帝国間の外交において規定が定められておらず、そのために、19 世紀半ばにいたるまで、両国間に挟まれていた諸集団（カザフ、クルグズ、アルタイ諸部族など）の帰属はきわめて曖昧な状況にあったことが明らかに

なってきた。

したがって、その後の 19 世紀半ば以降の露清間の国境画定の進行は、これらの諸集団の帰属問題に強く影響を及ぼしているはずだが、これまでの研究は、ロシアあるいは清朝（中国）の正当性ないし不平等性を主張することに拘泥する傾向があり、条約の文言や交渉の在り方を分析するにとどまっていたと言える。いわば「外から」の外交史を追うことに終始しており、二つの帝国に翻弄された民族集団について「内から」の検討を行うことを怠っていたと考えられる。以上のことが申請時における研究の動機であった。

(2)上を踏まえて解決すべき課題を設定すれば、1864 年以降の露清間の国境画定の時期において、境界線の確定が、いかに諸民族の帰属を確固なものとしたかを考察することが浮上する。さらに、この時代は、1864 年以降の新疆におけるムスリム大反乱、1871 年のロシアによるイリ事件などが起こる非常に混乱した状況にあったことを考えると、すでに示したような帝国側の思惑による帰属の確定のみならず、中央アジア諸集団の主体的な移動・越境により帰属を選び取る動きがあったことも見逃すことができない。そのような視点から 19 世紀後半から 20 世紀初頭にいたる彼らの動向を分析することによって、帰属問題のみならず、民族アイデンティティーの形成に結びつく集団意識をも考察することができるからである。

カザフ遊牧民の場合を例に考えてみれば、1851 年の露清間の新たな通商条約締結までに、カザフをめぐる勢力範囲は大勢が定まりつつあった。しかし、64 年のタルバガタイ条約にもかかわらず、新疆ムスリム反乱に巻き込まれたカザフは、越境を繰り返し、その露清間における帰属も揺れ動き続けていた。さらに、1871 年～81 年までイリ地方を占領したロシアの統治時代には、ロシア帝国内のカザフと清朝に属するカザフの間で、帰属意識の違いは明確になりつつあった。これら一連の動きが、今日中国と旧ソ連カザフスタンとの双方に、分断されるかのような形でカザフ民族が存在していることに直結しているのである。同様の流れは、他の集団にも当てはめることができ、本研究の課題の有効性を示してもいよう。

２．研究の目的

本研究は、19 世紀後半から 20 世紀初頭という中央アジア地域（中国新疆も含む）においてロシア・清朝間の境界が画定される時期の、カザフ・ウイグル・クルグズ・ドゥンガン・オイラト等の集団による露清間の国境の越境を研究対象とする。とりわけ、1864 年から続いた新疆におけるムスリム反乱期の越境の問題、イリ事件前後の帰属の揺れ動きを考察の対象とする。

それによって、帝国の境界確定、中央アジア諸集団の帰属変更、民族意識形成の三者間の関係性を明らかにすることを最終的な目的としている。

３．研究の方法

(1)研究手法としては、露清帝国の文書史料を調査・整理・分析し、その中に含まれる中央アジア現地側からの請願・訴状などの内容を抽出することによって、帝国間の国境画定が中央アジア諸集団の民族意識に及ぼした影響、越境に伴う帰属の変更と集団意識の変化の過程を検討し、帝国の領域と集団の移動との間の関係を示す計画であった。このような紛争解決―具体的には遊牧地や農耕地の境界にかかわる裁判―の事例からは、各集団の領域の境界線が鮮明になり、それは、この地域における各集団のアイデンティティーの確立とも密接につながっていたと考えられるからである。

(2)全体を通じて、本研究では、19 世紀後半～20 世紀初頭の露清帝国の文書史料の中でもカザフスタン国立中央文書館が所蔵するロシア側文書を中心に調査・分析を行うこととなった。それは、時間的制約を考慮したためであり、またカザフスタンに所蔵される文書史料が予想を上回って豊富な内容を持っていたからでもある。多岐にわたる史料群の中で、とくに注目して調査・分析を行ったのは、各民族集団間の紛争解決にかかわる史料であった。これらの多言語（露語、テュルク語、漢語、満洲語、オイラト語など）で記された裁判記録は、各集団の領域の境界線を明瞭に示す貴重な史料となっているからであり、そこからある程度各集団の境界認識を復元することが可能になると考えられるからであった。

また、さらに考察を発展させるために、露清外交の視点を導入した。1864 年のタルバガタイ条約以降、新疆・中央アジアをめぐる露清の外交交渉は活発化し、混乱のさなかにあっても直接的・間接的に交渉は続けられ、その成果の一つが清朝へのイリ地方返還を定めたサンクト・ペテルブルク条約であった。両帝国の交渉については、すでに公刊された史料（『籌辦夷務始末同治朝』など）を通じ

て、その詳細を把握できる見通しを得ていた。その精査により、先行研究においては交渉の推移を追うことにとどまっていた段階から、双方の主張の違いを、中央アジアの現地諸勢力が実際に置かれていた立場を炙り出すことに利用する段階へ進むことにつなげることを試みた。

４．研究成果

(1)平成 21 年度は、本研究が扱う問題の背景を考察することに比重を置き、19 世紀半ばまでの中央アジアにおける諸民族と露清帝国との関係について、その研究成果を学会報告や論文・著書の形で発表した。内容としては、第一に、ロシアと清朝の中央アジアにおける国境が定まる前段階において、その間に挟まれていたカザフ、クルグズ、コーカンドの各集団が果たしていた役割を貿易の側面から検討した（「中央アジアにおける露清貿易とカザフ草原」）。第二に、清朝が 19 世紀末にいたるまでカザフの有力者に与えていた爵位の制度について、清朝の辺境統治システムや、ロシアも含む中央アジアの国際関係にも留意しながら分析を行った（内陸アジア史学会にて口頭報告）。第三に、本研究の主題である民族の帰属と大きな関連性を持つ文書交換について、清朝＝カザフ間のそれを題材として史料の研究と分析を行った。これはその史料の重要性と学界に与えるインパクトを考慮した上で英文により発表することとしたものである（*A Collection of Documents from the Kazakh Sultans to the Qing Dynasty*）。

翻って、19 世紀後半以降の状況については、海外調査を実施できなかったこともあり、以前の調査時に不十分ながらも収集していた史料（とくにカザフスタン国立文書館所蔵史料）を分析する作業を行うにとどまっている。その中では、やはり露清間の国境付近における土地の権利にかかわる紛争・調停についての文書史料に、本研究が考察する民族と境界の関連を示す内容が含まれていることが明らかになりつつある。その点については、19 世紀末ロシア帝国による占領下のイリ地方（新疆西北部）の状況を中心にして英文で公刊した（“Reconsidering the Ili Crisis: The Ili region under the Russian Rule (1871-1881)”）。

(2)平成 22 年度は、初年度で考察した本研究が扱う問題の背景を基盤として、露清間の国境を越えて移動していた周辺諸民族の帰属と民族意識形成の問題を解き明かすことを目的として研究を進めた。

初年度から継続して分析している、露清間の国境付近における土地の権利にかかわる紛争・調停についての文書史料からは、司法の場における牧地・農地の領有の主張から、帝国への帰属意識を見ることが可能になることが明らかになり、その見通しについて研究報告を行うことができた（野田仁「カザフの「慣習法」とビイの裁判」第 7 回中央アジアの法制度研究会、2010 年 5 月 30 日、京都外国語大学）。

露清外交に見える移動については、当初ロシア帝国外交文書館での調査を計画していたが、十分な時間を確保できなかったため、カザフスタン共和国国立中央文書館において補足的な史料調査を行うことに力を注いだ。結果として、19 世紀後半におけるロシア＝清朝外交交渉の中で、両国間の境界を越境していた集団について言及のある貴重な一次史料（とくに露清の現地統治機関同士の交渉文書）を収集することができた。

研究の成果として、まず、19 世紀半ばまでの、いわば前段階の時代について、中央アジアにおける諸民族と露清帝国との関係を、とくにカザフ遊牧民の露清国境を越えての移動に焦点を当て、単著として整理することができた（『露清帝国とカザフ=ハン国』）。次に、19 世紀後半以降の状況については、カザフ遊牧民の一部族集団に焦点を当てて、50 年ほどの期間をサンプルとして抽出し、その間にその集団が露清間で移動を繰り返し、その過程においてどのように集団としての意識を形成していったのかを具体的に示す報告を行った（中央ユーラシア学会にて口頭報告）。以上により、本研究が目的としている、露清間の境界画定から周辺諸民族の帰属・民族意識形成にいたる過程の解明について、カザフ遊牧集団に偏りはあったものの、一定の見通しを得ることができたと考えられる。

(3)本研究から得られた成果については、和文・英文によって論文あるいは著書の形で公けにしたほか、今後の論文化を視野に入れながら口頭報告を日本語・英語で行うことができた。これらの研究成果の特色としては、第一に、ロシア帝国・清朝の文書を含む多言語史料を複合的に検討する点がある。本研究でも依拠した中央アジア諸集団から両帝国への請願・訴状はしばしば現地で多く用いられていたテュルク語により記されており、これらをマルチ=アーカイヴス的な手法を用いることによって、書き手の立場をより明確にしながら考察を進めることが可能になったと考えられる。

第二に、帝国が統治・支配しようとしてい

た諸集団の主体性を、一国史に捉われることなく、総合的に把握しようとする点がある。露清どちらにも偏らない立場から、帝国の統治と、それに対応して移動を繰り返す現地社会の状況とを同時に把握する手法の有効性について、国際的に訴えることができたと考えられる。

それは、二つの帝国の立場を、その間を移動していた諸集団の動向に主眼を置いて検討することにより、比較・相対化する視点を獲得できることを意味しており、ロシア・中国をも含めたより大きな視点で、19 世紀から 20 世紀初頭にいたる中央ユーラシアの構造を把握するという本研究課題の意義に照らして、2 年間にわたる研究期間において、根本的な史料の収集と有効となる研究手法の実施とが達成されたと考えられる。

すでに触れたように、カザフ以外の民族集団についての分析は時間的な制約もあり、本研究課題の中では十分に行うことができなかった。カザフの事例との比較も含めて、他の民族集団のケースについて、すでに収集している史料を活用しながら分析を進めることが今後の課題となっている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① NODA Jin, “Titles of Kazakh Sultans Bestowed by the Qing Empire: The Case of Sultan Ghubaydulla in 1824,” *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko,* 査読無, 68, pp. 63-94, 2011
②NODA Jin, “Reconsidering the Ili Crisis: The Ili region under the Russian Rule (1871-1881),” *Reconceptualizing Cultural and Environmental Change in Central Asia* (M. Watanabe and J. Kubota eds., Kyoto: RIHN), 査読無、該当無し、pp. 163-197, 2010
③野田　仁、中央アジアにおける露清貿易とカザフ草原、東洋史研究、査読有、68(2)、pp. 388-358、2009

〔学会発表〕（計２件）
①NODA Jin, The Kazak nomadism in the Ili region: under the Russian administration in 1871-1881, Central Eurasian Studies Society, Eleventh Annual Conference, 2010年10月30日, East Lansing（米国ミシガン州）
②野田 仁、対清外交文書に見えるカザフの爵位、2009 年度内陸アジア史学会大会、2009 年 11 月 14 日、関西大学千里山キャンパス

〔図書〕（計２件）
①野田 仁、東京大学出版会、露清帝国とカザフ=ハン国、2011、292 p.
②NODA Jin; ONUMA Takahiro, Department of Islamic Area Studies, Center for Evolving Humanities, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo, *A Collection of Documents from the Kazakh Sultans to the Qing Dynasty* (Central Eurasian Research Series Special Issue 1), 2010, 176 p.

〔その他〕
アウトリーチ活動として、中等教育教員向けに、『世界史の研究』（歴史と地理）への寄稿を行った（野田 仁「カザフスタン史と二つの帝国」225 号、山川出版社、2010 年、50-53 頁）。

なお、上記雑誌論文①については以下のウェブサイト（財団法人東洋文庫）上に掲載されている。
http://toyo-bunko.or.jp/newresearch/book_pdf/Periodical_list/MEMOIRS/Memoirs68/03_J.Noda.pdf

６．研究組織
(1)研究代表者
野田　仁（NODA JIN）
早稲田大学・イスラーム地域研究機構・研究員
研究者番号：００５４９４２０